

## 中国ステルス爆撃機の開発努力とその含意

### ——現時点で何を理解しておくべきか

地域研究部米欧ロシア研究室 相田 守輝

#### はじめに

2024 年の中国人民政治協商会議全国委員会及び全国人民代表大会（原文：全国两会）が終了した直後の 3 月 11 日、人民解放軍（People's Liberation Army：PLA）のある高官の発言が注目された。PLA 空軍の王偉副司令員が、メディア記者からの質問に対してステルス戦略爆撃機を公開する日が近いことを示唆したのである<sup>1</sup>。

新型ステルス爆撃機が登場するかもしれないとの報道は、過去数年間にわたって繰り返されてきた<sup>2</sup>。PLA 空軍の H-6 爆撃機の代替機となるこの新型の戦略爆撃機は、「轟炸二十型（以下、H-20 という）と呼称され、米空軍の B-2 ステルス爆撃機のように、電波を吸収する塗装を施し、或いは電波の反射を少なくする形状にすることによって敵レーダーに探知されることを局限する「ステルス技術」を備えている爆撃機と想定されている<sup>3</sup>。特に 2018 年<sup>4</sup>、2020 年<sup>5</sup>、2021 年<sup>6</sup>、2022 年<sup>7</sup>と毎年のように H-20 が初飛行するかもしれないと中国国内が熱狂したこともあり、海外メディアも H-20 初飛行の可能性を報じてきた。

しかしながら、これら噂とは裏腹に H-20 の公開は毎回行われることはなく、海外では次第に中国の技術力を懐疑的にみる声や揶揄する声さえ出始めている<sup>8</sup>。これら一連の現象は何を意味しているのだろうか。

一方、今回 2024 年 3 月 11 日のケースでは初めて PLA 空軍の副司令員が示唆したことから、近い将来に H-20 が公開される可能性は高いものと筆者は考えている。H-20 がどのような性能を持っているのか関心が集まるところであろうが、残念ながら公開直後の H-20 プロトタイプ機だけをもって能力を評価していく事にさほどの意味はない。何故ならば、プロトタイプ機と量産機では全く性能が異なるものになるからである。また中国には、伝統的に航空機を量産しながら都度改修していく航空機産業の文化もあることから<sup>9</sup>、将来運用される H-20 の能力評価には大きな振れ幅を伴うだろう。

したがって、現時点での能力評価よりも将来的な含意を事前に理解しておくことが重要と考える。

実は近い将来に公開されるであろう H-20 には重要な意味合いが内包されている。ただ単に「中国がステルス戦略爆撃機を保有しはじめる」と捉えるのではなく、中国国内政治の特殊事情、PLA 空軍の「軍種」としての役割の変化、核トライアド（核戦力の三本柱）の変化などに気づいていかねばならない。本稿ではこのような趣旨から、周辺諸国が事前に理解しておくべき事項について論述する。

---

## 1 つ目の含意：軍種間での予算獲得争い

---

H-20 の製造元は、西安飛機工業有限公司（Xi'an Aircraft Industrial Corporation：XAC）であるが、その親会社である中国航空工業集团公司（Aviation Industry Corporation of China：AVIC）は世界屈指の軍産複合体であり<sup>10</sup>、傘下のグループ企業が総力を挙げて H-20 の初飛行に向けて取り組んでいることと思われる。

前述したとおり、少なくとも過去 5 年間毎年のように H-20 初飛行が噂され、その噂は毎回立ち消えてきた。これら中国を震源とする一連の現象は実に奇妙ではあるが、この現象を純粋に解釈するならば、いかに中国がステルス戦略爆撃機の開発に携わる技術的ハードルに立ちふさがっていたかを物語っていると言える。

他方、初めて PLA 空軍の高官が H-20 の公開を示唆した背景には、中国国内政治の特殊性が透けて見える。今回の全人代期間には PLA 海軍高官から 4 隻目の空母の建設が明言され<sup>11</sup>、その直後に PLA 空軍高官が H-20 の公開を示唆している事から、軍種間でアピール合戦をしているのではないだろうか。

折しも、この半年前には PLA ロケット軍に蔓延っていた汚職によって李尚福ロケット軍司令員が更迭され、多くの幹部が紀律検査委員の調査を受けている状況にある<sup>12</sup>。「虎もハエも叩く」というスローガンで PLA の腐敗を撲滅してきた習近平中央軍事委員会（CMC）主席にとって、看過できない腐敗状況がまだ続いているのである。その為、PLA 各軍種の高官は紀律検査の動向が気になるのである。

また PLA の動向に関して見れば、PLA 海軍の空母はインパクトも大きく相対的にクローズアップされ易いのも事実である。そのようななか、PLA 空軍高官は PLA 海軍に引けを取らない奮闘ぶりを習近平 CMC 主席にアピールしたかったのかもしれない。中国経済に陰りが見られはじめるなか、軍種間での予算獲得争いに負けまいと PLA 空軍自らが奮闘している姿を懸命にアピールしているように見える。

## 2つ目の含意：軍種としての性格（役割）が「戦略空軍」へ

前述のとおり 2024 年 3 月 11 日、メディア記者からのステルス爆撃機はいつ飛行するのかとの質問に対し、PLA 空軍の王偉副司令員は「間もなく公開される、待ってほしい」と語っている<sup>13</sup>。この会見の直後、「中国が 8 年かけてステルス爆撃機を開発した」との見出し記事が複数のメディアから一斉に報じられた<sup>14</sup>。この 8 年という年月は、2016 年 9 月 1 日に馬曉天 PLA 空軍司令員が「長距離攻撃能力を強化するために新しい戦略爆撃機を製造する」と述べた時点から起算した年月だと思われる<sup>15</sup>。このわずか 8 年の短期間で戦略爆撃機を開発したとする報道記事は、中国の技術力の高さを誇示するとともに、習近平の「偉業」でもあるかのような印象さえ与えている<sup>16</sup>。

しかしながら、8 年間という短期間で中国がステルス戦略爆撃機を開発できたとは考えにくい。最新技術を駆使した軍用機の開発には 20 年近く要するからである。確かに、昨今の空軍の在り方をめぐる世界的トレンドでは、米空軍が推進するデジタルトランスフォーメーション（DX）のように、合理化が追求され開発期間も短縮化されつつあるのは事実だ<sup>17</sup>。例えば米国の研究開発ではデータを用いたシミュレーションや管理が改善され、ごく短期間に高等練習機（T-7）が開発されたケースさえある<sup>18</sup>。

中国でも同様、最新鋭の J-20 ステルス戦闘機を取り扱う成都飛機工業公司（Chengdu Aircraft Industrial Group：CAIG）が、完全にデジタル化された航空機開発を 2020 年前後から開始している<sup>19</sup>。航空機的设计は完全にペーパーレス化され（原文：飞机设计完全无纸化）、航空機の研究開発モデル、プロセスを抜本的に見直しながらか試作機の生産サイクルを劇的に短期化しようとしている<sup>20</sup>。

それでも複雑なシステムの集合体であるステルス戦略爆撃機をわずか数年の DX をもって開発したとは考えにくい。歴史的経緯を紐解けば、H-20 の開発は習近平 CMC 主席の影響というより、むしろ 20 年前（2004 年）に胡錦濤 CMC 主席が PLA に要求した新たな「歴史的使命」が起源のように思われる。この胡錦濤による歴史的使命への言及は、そもそも中国の海外権益を保護する為に PKO のような非戦争軍事行動（戦争以外の軍事行動：MOOTW）によって PLA の活動域を国外に広げようとしたものであった<sup>21</sup>。

ところが、MOOTW 以外にも様々な解釈が PLA 内部で生まれはじめ、PLA 空軍においても「戦略空軍」というキーワードが生まれ、共鳴していった。戦略的な早期警戒能力、戦略的なパワープロジェクト能力、戦略的な爆撃能力などといった「新たな能力」を求める声次第に高まり、PLA 空軍は中国の航空機産業とともに変革を遂げ、のちに早期警戒管制機（KJ-2000）や大型輸送機（Y-20）といった「新たな能力」を持つ航空機を装備していったのである<sup>22</sup>。

この歴史的使命の解釈が徐々に拡大されていった様は、昨年（2023 年）に軍人として最高位である CMC 副主席を最後に引退した許其亮による過去の論文からも読み取ることができる。2009 年 11 月当時に PLA 空軍司令員であった許其亮は、中国共産党機関紙『求是』に寄稿した論文のなかで PLA 空軍が変革する必要性を強調していた。

「我々は空軍戦略の転換を加速し、中国の国際的地位に見合い、国の安全を保障しながら戦略的任務を遂行できる現代的な空軍を建設し、空天一体・攻防兼備という歴史的使命を果たし、戦略的早期警戒（原文：战略预警）、戦略打撃（原文：战略打击）、戦略的パワープロジェクション（原文：战略投送）、戦略的抑止（原文：战略威慑）の能力を強化し、機械化から情報化への転換を実現せねばならない<sup>23</sup>。」

また 2010 年に発刊された PLA 空軍のドクトリン教範『戦略空軍建設論』にも同様に、PLA 空軍が「戦略空軍」へと飛躍的に変革していく為には、政治、産業、科学、軍事分野の連携が必要不可欠であることが強調されている。

「戦略空軍の強力な長距離打撃能力は一朝一夕に実現できるものではなく、近道もない。戦略空軍は国家と軍の根気強い投資と建設、国家科学技術の絶え間ない進歩と戦略・戦術の絶え間ない革新、国家と軍の指導者の先見的な指導に依存しなければならない<sup>24</sup>。」

このように、習近平政権がはじまる 2012 年より前からステルス戦略爆撃機の開発ははじまっており<sup>25</sup>、同時に PLA 空軍の軍種としての性格（役割）も「戦略空軍」に変わりつつあるのである。つまり、H-20 が運用体制を整える将来には、PLA 空軍も独立した戦略的任務を行える軍種になっているものと予想できる<sup>26</sup>。

---

### 3 つ目の含意：核トライアド（核戦力の三本柱）の変化

---

伝統的に「陸軍に隷属する航空部隊」であった PLA 空軍が、独立して作戦が遂行できる「戦略空軍」に生まれ変わっていく過程には、爆撃機の現代化と密接な関係にある<sup>27</sup>。その「新たな能力」となる H-20 の登場は、同時に中国の核トライアド（核戦力の三本柱）に連動していることも忘れてはならない。

PLA 空軍が核戦略にかかわりはじめたのは比較的早く、核実験に成功した 1964 年の翌年のことであった。1965 年から 1979 年にかけて爆発させた核兵器のうち少なくとも 12 発が、PLA 空軍機から投下されたものであった<sup>28</sup>。しかしながら、核の運搬手段として弾道ミサイルが世界的トレンドとなり、また PLA 空軍機の性能にも限界があったことから、空中発射型ミサイル（ALCM）の核戦力は長い間、構

築されないままであった。その結果、大陸間弾道ミサイル（ICBM）や潜水艦発射型ミサイル（SLBM）とは異なり、戦略爆撃機と ALCM の核戦力は軽視され、中国の核トライアドは不均衡な状態が長く続いてきた<sup>29</sup>。

一方で、2015 年に「戦略空軍」を目指すことが公になった PLA 空軍は<sup>30</sup>、戦略爆撃機の現代化に着手した。その第 1 段階目の現代化が、1950 年代からソビエト連邦より入手した Tu-16 爆撃機を国産化した H-6 の核搭載化であった。この H-6 を核搭載化した H-6N 空中給油・爆撃機は、2019 年の中国建国 70 周年記念の軍事パレードで航過飛行したことで初めて認知された。空中給油が可能な H-6N は核弾頭搭載の弾道ミサイルを搭載できるようにも改良されており<sup>31</sup>、PLA 空軍の核任務再開が指摘されていた<sup>32</sup>。

しかしながら、ALCM が占める割合は依然として小さく、更に H-6N が空中給油機を伴ってロシア本土や太平洋を横断飛行しないかぎり米国本土へ攻撃することは難しい事情もあった為、PLA 空軍が担う核任務は、米国本土への核攻撃というよりはむしろ周辺諸国を核兵器で威嚇（抑止）する役割と考えられてきた<sup>33</sup>。

そして第 2 段階目の現代化となるのが、近く公開されるであろう H-20 の存在である。「戦略空軍」としての変革を象徴するこの現代化に関しては、著名な核の専門家であるクリステンセン（Hans M. Kristensen）も 2020 年の段階で、中国では核搭載可能な長距離ステルス爆撃機が開発中であり、今後 10 年以内（2030 年まで）に量産も始まると予言していた<sup>34</sup>。また 2016 年に尹卓 PLA 少将も、米空軍 B-2 と同等のステルス性能を持つ戦略爆撃機を中国は開発中であり、その戦略爆撃機は PLA 空軍の戦略任務を象徴するものになるだろうと予言していた<sup>35</sup>。

昨年（2023 年）には、中国の核弾頭が 2030 年までに 1,000 発へ増加することが米国防総省によって見積もられていた<sup>36</sup>。この大幅な核弾頭の増加が、将来どのように PLA 空軍の核任務に係わっていくのか、周辺諸国は新たに注目していかなければならない。

このように、軍種としての性格が「戦略空軍」へと変革しつつある PLA 空軍は、爆撃機の現代化を進めており、同時に核トライアドにも変化をもたらす可能性を秘めているのである。つまり、H-20 が運用体制を整える将来には、中国の核戦略も変わっていくことが予想できる。

---

## おわりに

---

H-20 の公開が示唆された 3 月 11 日から現在に至るまで、H-20 はいまだ公開されていない。もしかすると、PLA 海軍記念日（4 月 23 日）や 3 番艦空母「福建」の試験公開を邪魔することの無いよう

PLA 空軍は CMC から指導、統制されているのかもしれない。一方で、初めて PLA 空軍の高官が示唆したことを踏まえれば、いずれ H-20 は登場してくることであろう。

冒頭でも指摘したとおり、現時点での関連情報が少なく、かつ根拠も不確かなことが多いことから H-20 の能力について議論する事にさほどの意味はない。むしろ将来的な含意について事前に理解しておくことの方が有益であろう。本稿ではこのような趣旨から、取り急ぎ 3 つの含意を提示した次第である。

(了)

<sup>1</sup> 「官宣！中国空军副司令：“轰-20 快了，你们等着！”『中华网』2024 年 3 月 12 日。

<sup>2</sup> 「解放军高官确认中国将研制远程隐身轰炸机」『环球网』2013 年 10 月 23 日；「非常罕见！中国绝密项目提前曝光」『环球网』2018 年 05 月 09 日。

<sup>3</sup> 2021 年は「戦略空軍元年」とも称され、中国メディアを中心に熱狂的な盛り上がりを見せてきた。

<sup>4</sup> “China’s Top-Secret H-20 Stealth Bomber to Make Maiden Flight Soon,” *SPUTNIK International*, October 10, 2018, <https://sputnikglobe.com/20181010/china-top-secret-bomber-maiden-flight-soon-1068771641.html>; 米空軍機 B-2 のバカリか？ 軍事専門家が予想する、中国のステルス各爆撃機『轟-20』の実力『週プレ NEWS』2018 年 10 月 29 日。

<sup>5</sup> 「中国のステルス爆撃機、秋公開か 香港紙が報道」『産経新聞』2020 年 5 月 5 日。

<sup>6</sup> Wang Xinjuan, “Ten years after J-20’s maiden flight: expect the next X-20,” *China Military Online*, January 12, 2021, [http://eng.chinamil.com.cn/OPINIONS\\_209196/Opinions\\_209197/9966765.html](http://eng.chinamil.com.cn/OPINIONS_209196/Opinions_209197/9966765.html).

<sup>7</sup> Akhil Kadidal, “China’s H-20 stealth bomber close to first flight,” *JANES*, July 3, 2022, <https://www.janes.com/defence-news/news-detail/chinas-h-20-stealth-bomber-close-to-first-flight>.

<sup>8</sup> Howard, Brad, “What We Know About China’s Secretive New Stealth Bombers: As rumors continue to circulate on Chinese social media about the People’s Liberation Army Air Force’s much-anticipated stealth bomber, the...,” *Task Purpose*, May 10, 2018, <https://taskandpurpose.com/news/china-h-20-stealth-bomber/>; “China Media Dismisses Stealth Bomber Reveal as ‘Fake News,’” *Newsweek*, May 26, 2021, <https://www.newsweek.com/china-media-dismisses-stealth-bomber-h20-reveal-fake-news-1594964>; “China’s stealth bomber H-20 may fail to breach US defences,” *The Meghalayan*, February 2, 2022, <https://themeghalayan.com/chinas-stealth-bomber-h-20-may-fail-to-breach-us-defences/>.

<sup>9</sup> 中国航空工業集团有限公司「殲 20 総設計師楊偉：你期待的都会實現」『中国航空報』2021 年 10 月 2 日。中国航空機産業の設計者の発言を踏まえると、先行的な研究を行いつつも逐次改良を加えていくことが奨励されており、生産や部隊配備以降にその都度、性能を進化させている独自性を読み解くことができる。相田守輝「分析レポート『中国人民解放軍空軍において 3 番目の戦闘旅団がステルス戦闘機を受領したかもしれない』を踏まえて」『鵬友』令和 4 年 4 月号、第 48 巻第 1 号、37 頁。

<sup>10</sup> 中航西安飞机工业集团股份有限公司、<https://www.xac.com.cn/>; この XAC 社は主に大型機を取り扱う中国航空機産業であり、近年では Y-20 大型輸送機の開発、量産も手掛けている。

<sup>11</sup> 「4 隻目の空母建造明言、中国海軍高官「技術に障害なし」『日本経済新聞』2024 年 3 月 7 日。

<sup>12</sup> 「中国、李尚福国防相を解任 在任わずか 7 カ月、理由不明 汚職疑惑も」『毎日新聞』2023 年 10 月 24 日。

<sup>13</sup> 「官宣！中国空军副司令：“轰-20 快了，你们等着！”『中华网』2024 年 3 月 12 日。

<sup>14</sup> 「新遠程轟炸機研 8 年 解放軍稱轟-20 將面世」『明報網』2024 年 3 月 12 日。

- <sup>15</sup> 「中国空军司令称正发展新一代远程轰炸机」『BBC 中文』2016 年 9 月 2 日。
- <sup>16</sup> 「或成兩會一亮點 中國軍方透露研發 8 年轟炸機 20 快亮相了」『RFI』2024 年 3 月 13 日。
- <sup>17</sup> 相田守輝「中国空軍をめぐるデジタルトランスフォーメーション：新しい整備管理システム導入から見える取り組み」『戦略安全保障研究』第 3 巻第 2 号、2023 年、防衛研究所、89–97 頁；“Air Force unveils ‘Digital Air Force’ initiative,” *Air Force Times*, last updated July 11, 2019, <https://www.airforcetimes.com/news/your-air-force/2019/07/10/air-force-unveils-digital-air-force-initiative/>.
- <sup>18</sup> Daryl Mayer, “eT-7a earns digital designation,” *Air Force Life Cycle Management Center*, last updated February 26, 2021, <https://www.afclmc.af.mil/News/Article-Display/Article/2517676/et-7a-earns-digitaldesignation/>.
- <sup>19</sup> 成都飛機工業（集團）有限責任公司、<https://cac.avic.com/>。
- <sup>20</sup> 「航空工業成飛与使命同行，助推中国空軍奮力騰飛」『解放軍報』2022 年 4 月 15 日。
- <sup>21</sup> 「肩负起我军的神圣使命」『解放軍報』2005 年 1 月 1 日；防衛省防衛研究所編『中国安全保障レポート 2011』防衛研究所、2011 年、2、26 頁。
- <sup>22</sup> 王宏亮「2021：戦略空軍元年：中国空軍跨入戦略空軍門檻内幕」『航空知識』2021 年第 11 期、総第 607 期、航空知識雑誌社、29–31 頁。
- <sup>23</sup> 许其亮、邓昌友「建设一支与履行新世纪新阶段 我军历史使命要求相适应的强大的人民空军：庆祝中国人民解放军空军成立 60 周年」『求是』2009 年総第 22 号、6-8 頁。
- <sup>24</sup> 丁步东、王兴宏『战略空军建设论』蓝天出版社、2010 年、326-327 頁。
- <sup>25</sup> 「中国空军天火隐身战略轰炸机方案设想」『现代兵器』2007 年 10 月 26 日；「解放军轰 10 远程隐身战略轰炸机方案设想图」『环球时报』2008 年 07 月 08 日；「俄称中国研轰-10 轰炸机可携核弹攻击美航母」『环球网』2012 年 06 月 28 日。ちなみに 2011 年の段階で中国は 2 種類の戦略爆撃機を開発中であった。そのうち H-8 という機体は全翼機の亜音速機であり、H-9（または H-10）という機体は細長い極超音速機であった。
- <sup>26</sup> 「中国空军跨入战略空军门槛，金一南：未来将全面建成世界一流的战略空军」『央庫軍事』2021 年 9 月 10 日。
- <sup>27</sup> 同上。
- <sup>28</sup> Hans M. Kristensen, Matt Korda & Eliana Reynolds, “Nuclear Notebook: Chinese nuclear weapons, 2023,” *Bulletin of the Atomic Scientists*, vol. 79, No. 2, 2023, pp. 127.
- <sup>29</sup> Lee, Roderick, “China’s Air Force Might Be Back in the Nuclear Business,” *Diplomat*, September 9, 2020.
- <sup>30</sup> 「中国空軍加快推進“戰略性軍種”建設」『解放軍報』2015 年 9 月 11 日。
- <sup>31</sup> Hans M. Kristensen and Matt Korda, “Nuclear Notebook: Chinese Nuclear Forces, 2020,” *Bulletin of the Atomic Scientists*, vol. 76, No. 6, December 10, 2020, p. 453.
- <sup>32</sup> Kenneth W. Allen and Cristina L. Garafola, *70 Years of the PLA Air Force*, China Aerospace Studies Institute, 2021, p. 83.
- <sup>33</sup> Lee, 2020.
- <sup>34</sup> Kristensen and Korda, “Chinese Nuclear Forces, 2020.”
- <sup>35</sup> “China Confirms It Is Developing H-20 Bomber Aircraft,” *Xinhua*, December 9, 2016, <https://www.defencetalk.com/china-confirms-it-is-developing-h-20-bomber-aircraft-68644/>
- <sup>36</sup> Office of the Secretary of Defense, *Annual Report to Congress: Military and Security Developments Involving the People’s Republic of China 2023*, p. 104.

## PROFILE

相田 守輝

地域研究部米欧ロシア研究室所員

専門分野：中国をめぐる安全保障

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。  
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。  
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通 : 03-3260-3011

代 表 : 03-3268-3111 (内線 29177)

防衛研究所 Web サイト : [www.nids.mod.go.jp](http://www.nids.mod.go.jp)